貴介問答　五

貴介問答巻之五目録

一 聖德太子。神國ノ佛法ヲ施行シ給フハ。如何ト云事 初丁メ
一 道ハ一ツノヨ。吾朝ノヨヲ。神道ト云ヒ。震旦ノヨハ。儒道ト
云ヒ天竺ノヨハ。佛法ト云ヒ。三ノヨヲ立ハ如何ト云事 七丁メ
一 本心ヲ吾朝ノヨハ神明ト云ヒ。震旦ノヨハ明德ト云。天竺
ニテハ寂滅ト立ハ。如何ト云事 九丁メ
一 吾國ハ神國ナルニ。神道廢テ。佛道ヨナガハ如何ト
云事 十三丁
一 兩部習合ハ。神道ハ。如何ト云事 十六丁
一 神儒佛ハ三教共ニ。皆治世ノ道ナルヤト云事 十八丁

一上古よハ仙人と云もの有。中古ハ仙人なれハ如何
しつる事　廿四丁

一大道ハ外よ。如しつふとなりやしつる　廿七丁

貴介問答卷之五

○問曰。聖德太子ハ用明天皇ハ皇子。天照太神ハ末裔ふく。吾朝の神道と行ど異朝ハ佛法と施行しつる事如何。

答曰。聖德太子ハ性質敏ふして。聰明なる故よ。神儒佛ハ三教よ能通し。時と考て佛法と施行し。國政うたまふ。然ハ聖德太子。自行ハれ。ぶ時ハ勅。行しつる。恭惟ふ。人皇ハ最初。神武天皇ハ時神德衰て。尊と稱ぜ。て。天皇と改。神と言ず。て人と称ぜ。ふ。天照皇太神。御讓ハ三

種の神器。同殿に齊ハ仕そまつりまるはゆ神
武天皇より第九代開化天皇まで。神德漸殘て天
下無爲也。第十代崇神天皇最神祇を崇重らるゝ
ゆゑ。國疫疾多。百姓流離し。或ハ叛者ありて天下
穩ならず。故に晨夕興夕惕て。罪と神祇に請神
威を恐たまひて。太神より代々御相傳の寶鏡の
神靈を大和國笠縫の里に移奉まつる。禁中に
ハ新に鑄改まつる。又四道將軍を置て天下漸治。故に
第廿代允恭天皇まで天下又無爲なる治也。第
二十一代安康天皇。在位三年に眉輪王に弑らる。

其故ハ仁德天皇の子。大草香皇子。殿中天皇の皇
女。中蒂姫の皇女を娶て眉輪王を生たまへり。時に
安康天皇。佞臣の讒を用て。大草香皇子を殺て。其
妻中蒂姫を立て皇后とし給。安康天皇意將浴沐
して。山の宮に幸。樓に登て。命酒て。情盤樂極て。言
語しるゝ頃に皇后に謂曰。汝親睦しゝ朕眉輪
王を畏し。眉輪王。幼少樓下に遊戲て。悉所談を聞
既して。安康天皇。皇后の膝に枕して。晝醉て眠
臥しゝ。是に於て。眉輪王。其熟睡と伺て刺
弑。時に廿二代雄略天皇と申ハ。允恭天皇第五の子

也。眉輪王ノ。安康天皇と。弑ス聞て。大ニ驚。即兄等
と。猜たまひて。甲と被。帶刀て。兵ヲ率。自將として
て。八釣白彦皇子ヲ。逼問皇子其害せんとす。
嘿坐して不語。天皇乃刀ヲ拔て。斬たまふ。又坂合黒
彦皇子ヲ。逼問皇子亦被害を知て不語。天皇ノ怒
怒弥盛乃并て。眉輪王と殺し欲て。案劾所由たまふ。
眉輪王曰。臣元より。天位ヲ求む。唯父れ仇と。報ノ黒
彦皇子。深所疑と恐て。竊に眉輪王に語て。共に間と
得て。圓大臣ノ宅に逃入。天皇使として。大臣使と
以て。報曰。蓋聞。人臣事あしで逃て王ノ室に入。見

君王ヲ。臣ノ舍に隱匿。方に今。黒彦皇子と。眉輪王
と。深臣ノ心と恃て。臣ノ舍に来もり。誰忍て。送ル
はんや。是よりて。天皇益兵と興して。大臣ノ宅
と圍む。大臣代て願臣女韓媛と。葛城ノ宅。七區ヲ
奉献て。罪と贖と請。天皇許たまひで。火と縱て宅ヲ
燔ふ。是に於て。大臣と。黒彦皇子眉輪王倶に燔ふ
死さしめ。時に坂合部連。贄宿祢。皇子と抱て燔死。天
皇常に安康天皇ヲ。市邊押盤皇子に。國と傳と。欲こ
とヲ恨て。人と押盤皇子に使し。陽期。狩獵て。郊
野遊せんと。勸て。近江ノ来田綿。紋屋野に。猪鹿多。

顯ハ皇子と野遊せんとて。孟冬寒風凄然之晨に
押盤皇子と駿射。天皇弓と弩。馬と驟て。陽呼曰猪
有りとく。押盤皇子と射殺。皇子帳内。佐伯部賣輪
とつゝもに。屍を抱て。駭惋で反側呼號。天皇誅十一
月壬子朔甲子。天皇有司に命て。壇を泊瀬朝倉に
設て。昂天皇位。天皇心を以て師とし。誤て人を殺
し。衆。天下誹謗て言太惡天皇也。廿三代清寧天皇。
廿四代顯宗天皇。廿五代仁賢天皇。廿六代武烈天皇と
申。武烈天皇ハ。仁賢天皇の太子也。仁賢天皇十一年八
月に崩たまふ。太臣平群真鳥臣。專國政と壇に

て。王たんとして。陽の太子。營畢て。自治館に
驕慢て。都て臣の節なし。是に於て太子。物部麁
鹿火大連女。影媛を致躬しいとして。媒として。影媛
の宅に向て期會らたまふ。真鳥大臣男。鄙に曾
て。太子甫て。鄙に曾て。影媛と。得まんと知の
て。大に怒て。速に大伴金村連。宅に向て。兵と會て
計策をめぐらす。連。數千兵を將て。路に徼て。鄙臣代
乃樂山に戮しつ。金村連。太子に謂曰。真鳥賊討
し。請。太子曰。能是と安者ハ。連に在。欲是に於て。大連兵
と率。自將として。大臣の宅と圍て火と縱て燔。真鳥

大臣乃子弟戮に。太子有司に命壇場と設て。泊瀬
列城に於て。陟天皇位。遂に都と定。天皇刑理と好法
令に分明。日晏て坐朝聞き〻。諸悪と造なまひて。一
に善に修し。孕婦の胎と割て。其胎と觀。人の
指甲と拔て蕁蔗に植し。又人に頭髮と拔て樹
巔に昇し。樹の本と斬倒て。落て死む。又人に
塘槭に入流出て。三刃に刃と以て刺殺て快に池と
穿。死と起。禽獸に盛。田獵を好。狗と走。馬と試。出入
時と避ず。大風甚雨に衣湿て。百姓の寒と忘。養と食
て。天下に飢と忘。大に侏儒倡優と進て。爛漫き樂と

なし。奇偉戲と設て。靡々に聲と縱て。日夜常に官
人と。酒に沈湎て。錦繍と以て。席と。衣と以に綾
紈と以てもかに多也。第廿七代継體天皇。廿八代
安閑天皇。廿九代宣化天皇。三十代欽明天皇と申す
欽明天皇十三年冬十月。百濟聖明王。獻釋迦像經論。
連尾輿中臣連鎌子。不用三十一代敏達天皇。佛法と
用。廿二代用明天皇。佛法と用。蘇我大臣馬子。詔に
用。守屋勝海。諫共用らしむ。三十三代崇峻天皇に
時。蘇我馬子。專佛法と用とす。守屋用こに諫。

是よりわく馬子守屋と悪て皇子達と力と合て守屋を撃其後馬子威勢強盛ゆへ崇峻天皇馬子を悪ゆへ馬子已ゝ悪と考て天皇を弑そ三十四代推古天皇の時聖徳太子摂政たまふ此時佛法を施行して天下を政しすゝ是よりわく考しに吾朝神武天皇より崇神天皇まで十代合六百三十年余第十一代垂仁天皇より名恭天皇まで十代合五百年余都合千百三十有余歳唯神国の根本と守神明の本誓と崇たまふまゝゆへ悠遠長久よ治まり第廿一代安康天皇の色

よ遂て肩輪王に殺らゆ雄畧烈の二天皇大よ酷刑と行て人を殺を好天下虐政にして治らず三十代欽明天皇まで代十代合て其間漸百十九年也此短〻く天下静謐のゝ事考ふべ第三十三代崇峻天皇の時蘇我馬子守屋と誅且天皇を殺是よ於て神風淪没人道滅絶ふ顕然ゆへ故よ第三十四代推古時聖徳太子神風を興し人道の滅絶と救とする術なり時佛法を大綱ハ諸苦所因貪欲為本ゝ人間一切の諸の苦ハ貪欲一也貪欲の根ハ皆色ゝ起る今欲と離色を棄ハ無

常の死を知り頓に止まる。されば人無欲なれば心備りて人の道を曉る也。何世も乱れしあらんや。
聖徳太子此佛法。此時に相應と考て。天下に佛法を
施行して政とちまつる。震旦にも五帝三王の時は。
王道大に行て。徳化厚く周の末に及て。天王と蔑
ろ。十二の諸侯各威を振ひ。戦国に及て。七邑となり。
秦の始皇一統すれども。覇道ゆへ。奢極て。終に陳
勝乱を興す。高祖是を治て。漢と改め。漢の末に王莽
無道ふるく世を乱。光武是を治て。後漢と改也。後漢
の明帝の時。天竺の佛法。始て白馬寺に入て。漸く

佛法中國に盛也。是聖道沉淪。人道廢て。後行は
非や。和漢國異なれども。其揆一也。然則聖徳太子。神
國に生て。神道を行ふ。知ざるは非。時を考へ。
施行しかるに。孟軻曰。苟に茲基ありといへども。時を
待べしと。知恵ありといへども。勢に乗べしと
いへり。されば聖徳自行ふ。時の勢行
ひ給ふ。いつれか欠。
○問曰。道は一なるに。吾朝は神道と名ぐ。震旦は
儒道と名け。天竺には佛道と名く。三道は立こと
如何。

蓋し道は一也其一則三と分るゆゑわく三れ道立也先
混沌は一よ天人地は三わり一天よ日月星は三わり一物よ
上中下は三わり是と統へ皆一物也故よ一世界に和漢天
竺は三の國わり三国は土地よわく風俗自異也其
異よ從ふ教と立よわく神儒佛は三の道立也道
三よ立ども続てんれば天理は一わ外よ道と名くるも
は一夫道とは人ちと下畧は言也ろかるは
天人地よちくわるふわく道と名くわ孟軻も夫
道猶大路のごとく然豈知るかんやとは大路とは
貴賤上下共よ知安き道なれば人求めざるは

志なくしてもとはいつまでくしもくれざるは神儒
佛は三の道も天地未分は一は理の外よ道と名くるなけ
れども其土地よわく教と立よなしくは差わり志
なるなれば其差異はよく辨て其一理よ通達すること
成ぐるは一は化教と立るとはいふ三国共よ一は理の闕ふ
充ざる時の事也一の理は充て行ども何の教とは
こくわんや一は理は充ふ行時とはいは時ぞわ吾
朝は天照皇太神震旦は三皇天竺は日盧舎那佛の時と
やいふん此時世朴民淳て上一人の心と下万民は心と
一なるゆへよ教は施所なしば道とは名くわ

老子ハ道ノ道トスベキハ常ノ道ニアラズ名ノ名トスベキハ常ノ名ニ非ズ。常ノ道トイフモノハ理ノ充ニ行ル時ハ人ノ欲ニ応ジテ天照太神ハ天柱トイフ。天上ヲ治ムル伏羲氏ハ仰デ天文ヲ観テ一メヲ畫ス。天下治ル。佛氏ハ阿字トイフ。道ノ本トス。皆是一ノ全体ノ充ル時ハ一ノ内ニ理氣質ノ三ノ自備ル。其三ヲ全行ルトキハ全体分ルトキハ理氣質ノ三トナル故ニ吾朝ニ天孫降臨ノ時ニ天柱ノ一ト三種ノ神器ニ分ル。儒ニ中ノ一ト知仁勇ト分。佛氏ハ阿字ノ一ヲ空假中ト分。是一ノ三ニ分レタル

よりてなり。是ちなみに教といふこと始まる。吾朝ハ天神地祇ノ道ハ天兒屋根命教たまふ。震旦ハ三皇五帝ノ道ハ孔夫子傳ヘタリ。天竺ハ大日盧舎那佛ノ道ハ釈尊ノ説たまふ。三國ノ教異なれども皆一ノ道ノ暁ノ教也。凡人生ハ天地合一ノ神ノ受事貴賤ノ同一理也。然バ則何善悪わんや。ただ氣ノ質トノ二ニ落ル種々不同ノ善悪出ル。されど人ノ善悪ハ氣質ノ起ル。三教共ノ氣質ノ正シテ理躰ノ性ニ帰さんとの教ノ也。其性ノ暁ルト吾朝ハ神トイフ。震旦ハ聖人と

ひ。天竺よハ。佛と云。此ハ三教共よ體用一元。顕微間なく。天地万物同根一体としつゝ。其一体ハ。實ハ一也。天地の實と。人ハ實と合一ゆく。事ハ行ハ外ゝ道と云ふ。然ハ三教と立しつゝ。畢竟天地の一ハ外よ。何の大道ハ。今日いづくか。すぐ。一ハ全体ハ。行と大道と名。是道一ゆく。三よ立の初也

○問曰。天命ハ本心ハ。吾朝よハ。神明と。震旦よハ明徳と。天竺よハ寂滅と。説と如何

答曰。日本震旦。天竺の教よ。ゆく本心ハ名異ゆ

ゆく。皆本心ハ實ハ。説よハ過ざる。本心ハ實と。則一の全体也。一ハ全体よ。自三ハ義。備よゆく。吾朝よ。むとゆと訓ひ。一の始。とハ。一ハ中。ゆハ一の終也。始と。理中と。氣終と。質也。神道よ神明と。ひよゆ。儒よ明徳と。ふ。當也。佛道よ寂滅と。ゆよ當也。是ハ統ぶ。むとゆと成く。實と。行を。道と云よゆく。三教共よ。道と名也。夫吾朝よ。神明と名。ひよ當と。ひハ開の畧。天地開と。いふ。吾國ゆゆにゆく。國東よゆく。日本と称。日ハ理ハ。ゆく道と立也。日の神ハ心と云。人人本心

とするにわく神明と名也日ハ神とハ天照皇太神
ハ御事也獨化耦生ハ天神六代ハ理氣立て伊
弉諾伊弉冊ハ陰陽ハ二神質氣顯ハ地神天
照皇太神と生ハ太神一理ハ始め日ハ理全備ゆ
ゑ日神と名吾朝國君ハ元祖ハ日ハ理と云ふ天下
と治ハ理と言ずして神とハ日ハ理氣質全
備形圓滿ハ明なる事鏡と同故ハ神とハ天地
ハ神と吾神と同体なる事ハ高天原ハ神留
と教ハ故ハ平生青白ハ幣と以て祓と勤ら不淨
ハ祓て清淨なる時ハ心胸諍謐て神明留座ハ外物

濁ハ心ハ本心ハ實氣得ゆゑハ吾朝ハ本心氣
神明と名ハ震且ハ明德と名ハ當氣ハ止氣以て道と立ハ
ハ中央ハ故ハ中國と称ハ止ハ知て而后定ハ
定而後能靜靜而后能慮慮而后能明德
と得ハ孔子もの給ハ止を知ハ至善ハ止と云
至善とハ過不及なる中体ハ氣氣云子思ハ中庸と
ハ孟子ハ浩然ハ氣と云ハ至善ハ中体ハ止ハ天性
ハ帰て本心明と明德と云故ハ常ハ勤と持て行
と正ハ言ハ省知致格物して中ハ止教ハ

文王の德と賛て敬止し。詩あり歌あり。人は君うて
は仁に止り。人臣うてハ敬に止り。人子うてハ孝に
止り。人父ハ慈に止り。國人と交てハ信に止る。曾
子しるかせり。天下を平にする道と。學ハ大學と云大
學ハ道ハ明德を明らかにする。民を親にする。至善に止る
とあり。故に中國ハ本心を明德と名也。天竺ハ寂滅
とゝハ。つゝ當るとハ。上下畧也。あつまるハ土也。土ハ質也。質わるとハ滅也。滅とゝ
其終の滅と曉と。ゆゑ道と立國と西にあり。西天竺と称
生者必滅とハ曉とハ煩悩悉離。心胸寂然とゝ。

心ハ活濁皆滅しゝく。天心に帰と寂滅と云。凡人性ハ本
心。元寂滅なれども。煩悩ゆゑ本心と濁也。煩悩とハ。本
心を煩しゝ悩とゝハ。人間の悩ハ。色と貪欲と
ハ二つ。始て百八ハ数に到ゆゑ。百八煩悩という。故て
常に百八ハ念珠を持て。煩悩を捨て。寂滅と曉と教
ハ。色欲及一切ハ貪欲を。皆質ハ欲也。此質ハ煩悩ハ心と
ゝゝハ。凡夫という。煩悩に穢て世にあり故に。穢土也
名。煩悩を離て。寂滅ハ心とする。佛心という。清浄に
て。世にあり故に。浄土と名。佛と凡夫との在世ゝく。世に
二ハなし。滅を曉と。曉ざるとハ異也。されど。迷故三界城。

悟故十方空本来無東西何称有南北と説て此空と
暁者生死事大無常迅速の理を徹し夢幼泡影の
見極まる三界城の色貪皆滅して空となる空なれば
寂かしく本分天心の實備て明故に天竺は本心と寂
滅と名也是本心を暁と佛と名佛此空なる所に寂光
の世界と立此空世界は善悪邪正なく賢愚得失
なく君臣上下なく平等なく寂は光是を寂
光と名又極楽と名也是神道は隠幽と立儒は無
極といひ仙郷は常世の郷と云ひ若在世の時
滅を暁らざれば死して亡魂如何ぞ清浄の寂光

浄土に往んや然則神道は一を始と以て心と暁し儒
道は一を中と為て心と明め佛道は一を終と為て心を
尽にわるとは始中終を天人地の三教と立るなり理
氣質を別たるとして皆一隅と挙て三隅と後の道也
若一隅と為て道と云ば三教共に誤なり三教を
統て考れば則一の全体也神道は宗源唯一と立儒は
一貫といひ佛氏一念三千三千一念と説皆是天理混沌
の一の始中終とすべく説也天理の外に何か極楽何の
神佛なんや神儒佛教異といへども理氣合一の質
と全しく本心の實と吾に得てしる外に道と

名ものう。若其本を忘失とゝろく放心し實の理を
叶ちべんば。三教共に道といつべゝず是三教は教を立
ゝ義。

○問曰吾國は神國なるに。神道廢く。皆佛道に成事如
何

答曰凡道と名ゝは廢ゝとゝれし。されど時の勢にわ
て盛衰は異わり。神道廢皆佛道になるとゝいふ
ゝ。夫吾國は神國と称ずゆへゝ天照皇太神より。
葺不合尊まゝく地神五代の間幾千万歳神德盛に
行神風既淳く治まわく。神國と称ずるゝ。神

武天皇に及神德漸衰ゆへに人皇と称ぜゝられども神
德の餘風良残て世扑民直ゝく人皇廿代元裝天
皇まゝく千百年有余無為ゝく治まり。第廿一代安
康天皇弑せゝられまゝしかゝ後天下静謐ゝ第廿代
欽明帝は時佛法百濟國より東漸。三十四代推古帝は時
聖德太子摂政ゝ佛法を擴ゝ天下は政ゝ
是より佛法。弥盛ゝく。神道弥衰。故に推古天皇は詔
に朕聞之曩者。我皇祖天皇等。宰世也天に跼地に踏敦
神祇を禮ゝ。周山川を祠ゝ幽に乾坤に通す是とゝろく
陽陰開和造化共調。今朕世に當て祭祀豈怠ゝ

や。故に羣臣為に心を竭して宜神祇を拜すべしとの
たまふ。此詔して佛法の盛なる神道の衰の事考
知るべし。其後佛法盛に行也。第四十五代聖武天皇伽藍
建立の願ありしかども。猶神國の遺法を恐るゝ
て。行基菩薩に仰て。其効驗を伺たまふ。爰に行基菩
薩太神宮に參籠し。祈禱して。神告曰。實相真如月輪
八生死長夜の闇を照。本有常住月輪八無明煩惱の雲に
拂。此文句面の詞八佛法に似たり。句中の意に到て八神代
の昔日神天の磐戸を開て。彼長夜の闇を照し。月神
八重の雲を別て。此葦原の中國に降りたまふ。是則無明

煩惱の雲を拂はゝ。然に佛像伽藍御建立の是
非。其告未詳なり。故に天平十四年十一月に。右大臣橘
諸兄公に仰て。勅使を〻〻伊勢太神宮に參して。天
皇御願寺建立すべき由を。祈るべき爰に件の勅使歸
參の後。同月十五日の夜。示現して。皇帝。御前に玉女
坐して。金光を放て。宣く當朝神國の神明を欽仰
奉るべしゝ。而に月輪者。大日如来也。本地盧舎那
佛也。衆生者。此理を悟解して。當に佛法に帰依すべ
しと。夢覺たまひて後。弥堅固道心しるしめ。始て
件の御願寺を企てたまふ。東大寺是也。天平十五年癸

未十月小創て大佛の像を作らるゝ。是より前に州
〻〻小國分寺を建。又始て州〻〻小國分尼寺を建る。
皇后を光明皇后と申。皇后も西金堂を興福寺に
營。又法華寺を建らる。聖武皇帝天下を治めること
二十五年小〻〻天位を御女高野姫に禪らる。高野
姫御代を受らる〻〻孝謙天皇と申たてまつる。是第
四十六代女帝也。御母は光明皇后と申す也。勝宝元年七月二
日小禪を受て。位を即らる。天下を治ること十年也。時
に舍人親王子大炊王と皇太子やして。御位を禪給
後出家して。法名を法基尼と号したてまつる。

第四十七代淡路廢帝と申は。則大炊王也。天平寶字二
年。八月高野天皇の位を受らるゝて。在位六年也。時に高
野天皇と廢帝と隙あり。遂に淡路國へ配給也。第四
十八代稱德天皇と申は。則孝謙天皇の御事也。孝謙天
皇重祚〻〻。改て稱德と称〻〻る。稱德天皇元
年。乙巳に道鏡を寵幸〻て。太政大臣に〻〻法皇の
號を授て。百寮朝賀を受〻め。天下を治〻て五年。是
に法皇と申す。興もて。寶亀元年。八月四日に
天皇崩因て高野天皇と号ら〻る。是より已来宇
多天皇圓融院華山院白河院後白河院後嵯峨院

後深草院後宇多院伏見院後伏見院花園院後小
松院皆位を禪て後出家し給へ法名を御諱し
給へ是かゝわてらしで佛法弥盛に行て神道弥衰
し考知る〻神道廢て仏道に成しいよいよ盛
に行と行ざるの異也

○問曰神は吾國の神明佛は天竺國の佛人皇三十代に傳
来せる佛と吾朝の神は本地垂迹両部習合の神道と
立し如何

答曰夫佛法は釈尊より説始たり釈尊は震旦の
周昭王廿五年に當て天竺に生給ふ佛法震旦に
入事釈尊入滅の後千五百歳を歴たり其後又四百
數十歳を〻〻百濟国より欽明帝の時に傳来る何
吾朝の神と天竺の佛と一なるべきや然諸神の德と
諸佛の德と相感じて理一なるべきに附合するか
ら〻其盤觴を尋るに欽明天皇より後十五代其間
百八十三年を〻〻聖武皇帝の夢想に日輪者大日如
来也本地盧舎那佛也と天照太神示現給ふ云
〻起る其後桓武天皇の時真言の密教始て本朝
に入嵯峨天皇の時空海帰朝し〻真言法盛に行
る當に知去天平に示現し給ふ胎金両部の大日盧舎

那佛ハ一切諸佛菩薩ノ惣躰也。舍那ノ生身ハ吾國ノ本
主。日月両神ノ尊形。已ニ明鏡者乎。故ヨ顕密ノ二儀ト
設本跡ノ二門ヲ立。宮社ノ縁起ヨ隨テ。相應ノ諸尊ト
以ク本地垂跡ノ差別ト稱シ。顕密ノ二儀トハ。一ヨハ顕
露ノ顕佛ト以ク本地ヤ。神ト以ク垂跡ト。一ヨハ
隠幽ノ密神ト以ク本地ヤ。佛ト以ク垂跡ト。顕
露ノ顕ハ浅畧ノ儀。隠幽ノ密ハ深秘ノ義也。今佛ト
以ク本地ト云ハ。是浅畧ノ一義也。傳教弘法慈覺知
證等。四大師真言ノ奥義ト極。吾神道ノ密意ト悟ル。
大日本國ノ名ト得ク。大毘盧舍那佛ノ實地ト覺ル。

神代ノ書籍ニ云ク。秘密ノ釈義ト設。各一師ノ神
道ト号ノ皆胎金両界ノ法ト。内外ノ二宮ニ習譜尊
ヲ以ク諸神ヨ合。故ヨ両部習合ノ神道ト云ヘリ。
ヨリ以来顕密ノ諸宗神道ヨ入テ。未書ノ述者其數五
百余巻。故ヨ是ト本師流ノ神道ト云フ。真言ノ顕密
ト云フカ。神道ノ顕露隠幽ト云フト。一理也。昔高皇
産霊尊。天孫降臨ト催シ給フ時。鹿嶋揖取ノ二神ヲ
御使ヒトシテ。大己貴ノ神ヨ勅曰。夫汝所治顕露之事。
宜是吾孫治之。汝則神事ヲ治ヒ。大己貴神。執曰。
天神勅教慇懃如此。故命ヨ不從乎。吾所治顕露事ハ

皇孫當治吾將以国事を治しいまり一本より万殊に渡て王道を行と顕露しかた万殊を行て一本に帰し隠幽しかつ是則陰陽変化之理功成名遂身退之義也諸佛如し陽徳陰徳各修し得て功徳にうれて理と考合して本地垂迹しかた是両部習合の擬也然ハ推古天皇より佛法を興しかたく神に配當すること如聖武天皇の夢想に原て四大師真言の顕密し吾朝の顕露隠幽し習合して両部しかた名也故に神本佛し四大師しいて両部習合しいるハ是此所謂也

○問曰神儒佛の三乃教皆治世の道しいるハ如何

答曰三教共は皆治世の道也道とうるとし各殊しいへども皆天地未分の一理と暁て行ふ外に道し名の無し治世しかた天子しかり庶人に到まで壹是に皆身と修しかた修身しかた天理に循て吾人の氣と養こと也しかた天理ハ元一しかり千万無量に分るなり一物なるハ一理ありしかく一物々々理氣と離て質にうれかく質ありしかるも衣食住の三の欲ありて衣食住乃三理氣の中体にかく叶へり今人の性命と送と天理の常に循て氣の養しいかたれや若夫天理の常にあらざ氣の養こしかたちまち人ハ衣食住の三乃欲ありて千万

無量に私欲出多、或谷に或ハ驕、或ハ上と僭し、下と輕
じ、或ハ父と弑、君に弑し、皆是より起る。故に今
に俗ハ、氣と治ゝに、ちゝ、ずゝ、法と敗られと乱氣と
なる。古に人と人面獸心しいゆゝめゝ、人に中に入ざる國
土に乱氣に、ものなしに、治むるハ國主治世に道なり。
三國に小教と立る。一人に君と正に肝要なり。先吾國
伊弉諾伊弉冊尊、御宇宙珎子と生んゝゝ。天照太神
と生ゝ給ふ。此御子一に全体と受たまひて、徳光天下に光
華に、父母に神大に悦ゝゆゝゝ、天下に君ゝゝて、万民
と治むゝ。其徳に化して、天下無為にゝゝ治まり。

震旦に聰明叡智に人と挙て、億兆の君師ゝて
治て教ゝ、伏羲神農、黄帝、堯舜是也。堯舜、天下と
師に仁と以ゝ民従、桀紂、天下と師に暴と以ゝ民従ゝ
いゝゝ。天竺に國主波流黎、佛に白て言、我國、邊
小頻年冠疫ゝ、穀貴ゝ、民困む。我常に安ゝに、惟
願ハ、妙法と垂示ゝゝ。佛の言、大王、若煩悩と滅ゝ
欲ハ、當に木槵子一百八箇と貫て、常に自身に隨て、志
心に南無佛陀、南無達磨、南無僧伽、名ゝ、稱て、千万遍
ゝゝ。百万遍に満て、百八に結業と除ハ、常樂と獲ゝ
ゝ。答ゝ。是ゝゝ。佛家、諸宗、皆念珠と持也。然ハ三教共

と教と天下の君と傳ふ本意とするにわづかに夫神道の教は清浄と求て不浄を稜と教へん不浄とは陰陽の愛氣と濁て元の神と帰さるを云ふ則悪魔と名づ儒道とは己と克て禮と復る教へん己とは氣質の偏と隔て天性と帰ざるを云ふ則下愚と名也佛道とは煩悩と滅しく故心を得と教へん煩悩とは貪欲に溺て故心と帰ざるを云ふ則凡夫と名也悪魔と云ふ下愚と云ふ凡夫と云ふは皆是質の欲と抱て理氣の一と帰ざるを云也不浄の悪魔と稜ふは天神明留座と下愚の己と勝ふは礼と復本性存す凡夫の煩悩と滅すとは故心の佛躰と帰る稜と云ふ克と云ふ滅と云ふは皆質の偏塞と去事也神と云ふ聖と云ふ佛と云ふは中躰の實と帰ると云ふ中と得ると云ふは理氣質の三ぬ全成て一の全躰と帰せずして不ふるなり然則三教皆質の愛と正しく本心と直と云ふ本心直則身修々則家齊々則國治々則天下太平也是三教共と治世の道ふわづかに時と和漢共と天竺の佛法盛と行ふ釈尊の所謂正像末の三と立ふ末世と到て吾道東漸ひんとして欲震旦ふくは後漢吾朝ふくは欽明帝の時より事始て漸々の盛也上古ふるとは神聖の

下ハ賢人君子わり。末世ニ及テ。上ハ神聖ヨリ下ハ
ゼ下ハ賢人君子なし。且中人以上ハ賢とすべし。
人以下ハ人多し。中人以下ハ凡人を愛と好く。常ニ忘
怪と重らるゝ。信ハ重とすべし。中人以上ハ。上
と語ル。中人以下ハ。上と語ル。孔子ハ
うし。神儒ハ二教ハ。君臣父子夫婦昆弟朋友ハ五倫と本
ゝ。中ハ。夫婦と以て道と行ハ端ゝ。致知格物し
て。己ノ誠と尽して。人物ハ誠と尽天地ハ
化育と賛て。天地と参と成也。是中道ハ誠を得て。天
ハ理氣ニ帰と。教ハ次則常と以く。質と正ハ道也。佛

氏ハ教ハ去ゝ。君臣父子夫婦昆弟朋友ハ五倫と
離て。出家と号し。中ハ夫婦と絶と以く。道ハ行
ハ始ゝ。五戒と去く。奠肉薫酒と用ず。三世と説て。
吉凶ハ輪廻と止。肉果と以く。禍福ハ得失と定め。生
と軽し。死と重し。方便譬喩と。設て。煩悩と滅と。則
変と以く。質と正ハ道也。質と正と否。煩悩皆離
菩提心と。故ニ煩悩即菩提と。菩提心なか
ゝハ本心寂滅ハして。天理ハ真ニ帰ゝとなれ
し。真と以く行ハ。諸悪莫作衆善奉行ゝ。
物各其性と得て。天下太平ハ。居

主是と用て色欲貪欲うすく慈悲自生也。愚慮是を聞て未来を恐。太悪自休。是常と離て常に帰て道非や。神わくも。儒わくも。佛わくも。上一人清浄わく。天理に實を得られ。天下國家治ずしてふ。故に三教共に。治世の道しいつる。夫吾國は天照皇太神に國わして。天子其統に受継ぎ。民を是天照皇太神に民わ。天皇の德化を蒙りてわ。吾國の教唯一神道と学んと志ととし。第一わすべし。唯一神道に血脉と申は。天神伊弉諾尊。天照太神。正哉吾勝尊。天兒屋命。雲海龍尊王也。然バ天兒屋命は天照太神より。直授相傳。殊に神事宗源と掌とのを。代々相兼して。二十一代太織冠鎌子まで。相傳まつり。太織冠の時入鹿乱と興りより。從父昆弟。伊日麿に。附属しまつる。神事亀トに本と傳まつる。伊日麿に家。今に卜部家也。故に卜部と。神道長上と。ひ亀トの事と。今に主まつる。其兒屋命に口傳直授を。即中臣に授也。中臣に授を天人合一の授。なれば。天地に建て悖らず。神明に質して疑なく。身に本て庶民に徴あり。古今一貫に徳行なく。其後舎人親王日本紀三十巻に撰ぶ。一説に。

中臣は祓より本づいて。天神地祇。天人合一の道理なり。
〳〵なり。神代の巻〻名残り二十八巻。一口今の
治乱とちがひなし。太織冠啓白文云。夫善言
美詞は解除こい。元祖天兒屋根尊は妙業素盞嗚
尊は。悪行と。退け。天照太神の。天は岩戸と開て。日
夜の分と。遍六合を満しめ給へ。此神能は起り。
然バ人皇三十余代まで。家國の群生皆悉く我が
以て。三世に立て。遂に外國の力と。備ざるものこ。
世漸く澆季に降て。人心妄にして。正と疑ひ邪と
信じ。元と妄にして。未と乱る。茲によりて厩戸皇子。

始て儒釈道の三教を立て。衆生應化の方便と演
べ給へり。是は全く異国の傳法也とのり。今は世や。天
下泰平。國土安穏なるゆへよ。神儒佛は三の道並行
なり。苟も孔夫子曰。道並行而相悖らず。小徳は川
流し。大徳は敦化す。とも。扨今也其人と師ら
て。中臣神代。唯一の道は。相傳と受とは天地未分
は一本と天地已分は方殊と。唯一に帰すること暁て
天地の神と。吾神と同体なる事とよく考て。中道
は理に叶へ。本分は實と得ずと云事なり。何異朝
の傳法とかんや。嗚呼吾國に生て。吾國の道に

〻〻ざる事。誠に嘆ずべし。誠に恐べきもの

○問曰。上古には風雲に乗じて。虚空を飛行し。不老不死

の仙人ありと。中古よりわ。仙人なし。其故は如何

答曰。天地の間の人間禽獸草本。生ずるいけるもの

皆神と具。氣を受て。質を成す。中にも人は万物の

霊なりて天地の氣を全く受也。上古の世朴にして民淳く

して情欲少きゆへに。天命の真氣よく備る故

に。神明仙人聖人佛と成るもの多し。夫神聖は天地混

沌の一氣を受て。日月と明を合。陰陽と氣を齊し。

四時の造化と行を一にし。天地と共に政を行ふ人

也。佛は混沌の一の終りを曉て。五倫を離。世界を穢土と思

ひ。陰陽造化の逆氣を厭ふ。五塵六欲を名て五塵六

欲心と煩悩と名。煩悩を捨て本心に帰

と。佛心と云。衆生を離て。衆生を渡す人。仙人を混

沌未分の一氣根と云。陰陽の未發を求て。已發を捨。天

下國家の安否を顧ず。是非得失を忘。神を無為の

郷に遊しめ。心を恬淡の疆に安し。陰陽と共に呼吸

して。真氣を丹田に養。飢渇を離。若飢渇すれば

万木の花實を食し。千草の露を掌に受て自嘗。

風雨の雲にのぼり。いつも混沌の心にして。陰陽の道

以て不老不死。己と守る。性命を失ざる。人也。昔少兵ハ
名命ハ。天下に蒼生及畜産にあり。療病の方を定ハ鳥
獸昆虫に災異と攘たり。其禁厭に法を定るあり。
後漢嶋に行て。栗堇に縁しつゝ彈渡りしく。常世に
郷にいくりゆくさ。栗堇を彈くハ。天地の氣を呑く
陰陽と共に呼吸し。五穀を食ずといふと云。是五帝朝に
仙人。醫者厭者に元祖也。黃帝と岐伯と問答して
天地に造化と。人間の流行と。同一と論じ。養生に理と
立て。醫術に教へ。後首山の銅を採て。鼎を荊山
に下に鑄る。鼎成て龍あり。胡鬚に垂て。下て黃
帝を迎。帝上て騎羣臣后宮從て上るもの。七十余人。龍
乃上て去。餘小臣ハ上る能ハ得ず。乃悉龍に鬚を持。龍乃
鬚拔脫して黃帝に隨ず。黃帝既に天に上るあり。
百姓下て仰望也。老子ハ周に衰ぬと。遂に去て關
にいる。關令尹喜曰。子將に隱共して強て教たる
書に著。是に於て。老子迺上下篇を著して。道德乃
意と言。五千余言にして去。其終所と云ず。是異朝
仙家に祖也。中古已來ハ。情欲深して。神氣を養こと能
ず。形と亡く。心に役して。一生に間。陰陽合に混
沌と。安に夢もなんざしを。如何うく。偽人あんと

今は其形代残るハ醫術也。されど當時代醫者ハ昔
帝岐伯代天真式養未病を治して已病を治せざるとハ
ゐ根元を味ふ。漸中興東垣河間ゐ藥方式求ゐるに
して望聞問切代切ゐる。陳無擇ゐ三因乃方論と考ゐ
し疎して方を立。本より吾儒よりゐずんゐ醫も亦
ゐ朱丹溪ゐ心ともく喩ゐ。只名聞利要式
求ゐめゐ業と施偶病を治し。皆是詭遇耳也嗚呼
衰哉。孔子代南人有言曰。人ゐして恒なくゐ巫醫ゐ
作ゐず。信哉しゐ多ゐ。代人間ゐ信なゐ人と
ハいゐ。別て神明ゐ仕ゐ巫と。人代事を預ゐ。醫
者ゐ。一人信ゐ。叶ざるゐ。代ざる。今代世の醫師ハ。
多ハ垣なく人也。信ある醫者ハ。いまゐ。吾未是を見ざる
欲さハいひがゐ。今代世ゐ生ゐ。名利と離。人我と
忘黄帝岐伯代論式立ゐ。天人合一代理陰陽造化代
流行と考て。實ゐ一代理体と味ふ。業と施ゐ。上古乃
神仙ハ及ゐ。已ゐ氣を養。人代病を治すゐ
ゐ。及ゐさゐの也。されども。真代醫者とゐハ
況や風ゐ。雲ゐ。仙人なゐ。ことゐ。

問曰。大道代外ゐ妙ゐ。ゐ。

答曰。大道乃外ゐ妙ゐ事。ゐ。ゐにハず。道代至極ゐ

到て妙とゝ云ふのみ。夫正道は不可思議と妙と名
け邪路の不可思議と怪と名也。今人其分にしたがひ常
に奇怪とゝ云ふ皆妙とゝいふ。大うの誤也正道は不可思議
は妙とゝいふ。天地未分陰陽不割渾沌如鷄子。溟涬含
牙其清陽者薄靡為天。重濁者滯為地精妙之合
と。摶易と。舍人親王はのゝたまふ。妙は始は說也。詩云予
懷明德不大聲以色子曰聲色之於化民末也。詩曰德輶
如毛。毛猶有倫上天之載無聲無臭至矣。子思はのゝ
たまふと。妙は終と云也。道可道非常道名可名非常名。
玄之又玄衆妙之門と。老子はのゝたまふと。妙は曉の教へ

と云也。然りと妙は大道は始終よりの隱幽の根元也。日輪
は陽德圓滿は光とはして。晝輝と日は妙。月輪の陰德
盈昃は光とゝして。夜照と月は妙。人も天地は神を同
体に受て生ふ人は妙。道は至極は曉てしれば。仰弥高
鑽と弥堅是は瞻に前ふ在とすれば忽乎として後
にあり。形容とゝ云ふ。ゝゝ妙と名是常道
は至極也。常道は古今不易は道なれば人皆妙とゝ
云ふ。ゝゝず。道の外に妙と求と。思ざる事は甚也。古
より。神明聖賢仙人は妙と。皆道は至極。寶は到る。
寶は外に道とゝ。道の外に妙とゝ。一は全体の理に

体認すべし。姫取よりてこれを云へば。神明は千二
歳無量の壽。仙術の不老不死。風雲上乗も。一理の妙躰。
真神は實と。得の德也。されば一事あるも。真實備りの
よハ。必妙あり。昔天津彦火瓊々杵尊。日向の吾田の長屋
笠挾の碕より到りたまへし時。鹿葦津姫を娶て一夜より
しき娠り。尊未信之曰天神の子といふとも。一夜の
間より。何娠とあらんやと。姫恨たまへば。言と
いふく明るさやうあるべき。無戸室と作て。其内より入。
妾所娠若天孫の胤ならば。害とはずんば。必難滅なん。實に天孫
の胤なるべしば。害とはずして。火とはいふく。室を燒。室を燒
ども。姫の身を燒ずして。三子と生たまへり。殷湯王。在位
七年より大旱。乃社稷の神を求ども。雨と示ふべ。
湯曰。社稷の神を。是堯の時の稷官。姓姫字は棄。何ぞ
堯の神灵なるや。宜除べし。大史奏曰。除べ
ず。人を燒て。天神と祭バ雨必降。湯曰朕身無德ふして。
此大旱といふ。今更一人と燒て。天と祭バ罪朕身あらん。
願を天下均く雨沢より沐せば。朕當ふ自身と燒くべ。遂より
殿前小柴を積。天子自柴の上より登て四邊より火と放火
勢漸逼ふ。忽然ずして。雲起雨下て。火乃滅。王命
を存ふ。得。天下咸蘇。仰て天子の德と戴也。是等を

事ハ奇妙ノ到るしだ。鹿葦津姫も湯上を自己燒
ハ信より此妙行と。今也事と爭ふ。神前の鉄火
と取ハ信ゆるハ手燒ず。偽ものハ手必燒と云く。考へ
知べし。大悟聰明の人。理の至極の常なれバさのと
妙ともいふべきしも。凡常ハ人ものハ不可思議ハ妙
といふ。又邪路ハ怪といふ。昔大巳貴ハ時草木咸能
言。今も狐狼野干ハ化さしハ人ハ奇こと。死靈ハ歯吳く
ゆるハ類。非常ハ事といふ。是妙ハ怪といふなり。
背是一元天真の神氣。其一元ハ帰ことなくして。
陰陽二氣ハ變屈より。種々ハ妖怪ハ成ん。是故ハ天子

道と失國家亡とする時ハ必妖孽あり。國家興とする
時ハ必禎祥あり。ともに。さしを邪路ハ妖怪ハ必正道ハ
て。示ハ消滅せ。ハ。然ハ大道の外り。妙と
いふハ人事。顯然也。天人合一ハ理と。ちがハ
ずんば。如何。ふ。よく妙ハ理と。ちがハ
宜く心ハ尽すべきもの。

貴介問答卷之五終

貴介問答者公子與先生道心人心惟一之議論而高天原欲令留於神明之問答也先生姓源氏甲賀名順益字秀實號伯菴亦称杏隱子其性質寛博謹慎不求名聞不慕榮利廣通神儒佛之三教最深信吾國之神道不執善不捨惡執其當然託躬於鴻方而博濟衆病焉往昔干公門有衆工束手之難疾而召先生先生察其因

診其脉施藥獲功而病自愈公門欣然感
其神速欲叙法橋先生固辞然竟遂天
聽叙法橋義譽芳聲震乎幾内也今為此
書也第一論脩身齊家之受用第二舉神
明天上之德化第三記人皇中國之政刑
第四明異朝儒佛之東漸第五暁唯一太
道之妙用皆是一本万殊々々一本而務
本之意嗚呼可謂盡矣苟体用一元顕微

無間之理顕然可考之小子記此問荅予
請不以真名而以假名記之不啻為諸生
庸常之人讀之欲令容易讀之者再三反
覆則天地混沌之一理乾坤流行之万殊
及古往今來之治乱齊家脩身之枢要皆
原唯一之實開巻可自鑑矣先生論道教
人之仁心可謂魁偉者也予感其功而跋
之云尓

門人林玄悦

元禄三庚午年孟春吉辰

武村三郎兵衛

同　新兵衛

寺田与兵次

梓刊